

平成27年度 第1回秋田県農山村ふるさと保全検討委員会議事録（要約版）

○質疑応答

【秋田の元気な中山間21選（仮称）の検討事項について】

（B委員）

中山間地域を、農地の利用状況等から「適切に保全管理している地域」と「耕作放棄地の拡大が懸念される地域」に、現状のデータを基に類型化することのだが、調査の仕方を公表すると、より将来に向かってのイメージや地域が見えやすくなり、各種政策にも幅が出る。

（課長）

農林統計センサスのデータにより、それぞれの地域での農業人口等がどう推移し、農業構造がどう変化してきたのかを把握し、その上で現地調査を行い類型化していき、施策を講じていくための調査としたい。調査項目については、今後さらに検討していきたい。

（E委員）

21選の「21」の意味は。また、推薦する地域は1市町村から1箇所とかにこだわるのではなく、優秀なところは2箇所とか出すことが可能といったイメージでよいか。

（事務局）

21世紀ということで21を使っており、選定数は21にこだわっていない。また、各市町村単位での選定数に制限は設けていない。

（E委員）

一旦、選定された場合、何年かのスパンを経て再認定の審査を受けるような決まりはあるのか。

（事務局）

今のところ再認定の審査は考えていない。

（委員長）

20分の1という急傾斜が要件だが、これは絶対入れないとだめか。

（課長）

この事業は、中山間地域における土地改良施設等の利活用及び保全等を目的に造成した「ふるさと水と土基金」や「棚田基金」が原資である。棚田の定義が20分の1以上の急傾斜であり、基金を活用していくことから、一つの要件にしている。秋田県では20分の1以上の急傾斜の農地が約9,000ヘクタールあり、その急傾斜地を含め広がりを持った区域を棚田地域としており、棚田地域は約17,000ヘクタールである。

(委員長)

例えば、1ヘクタールの候補を選んで、その中に耕作放棄地がなければよくて、その周辺に耕作放棄があってもだめとは言えない。今ある耕作放棄地を解消しようと思っているところも対象にするのかはどうか。今年まもなく募集するのだから、来年は解消するというところも選んでもいいと思う。

(課長)

耕作放棄地があるからダメといった杓子定規に決めるのではなく、解消見込みがある場合は配慮するといった弾力的なとらえ方をしたい。

(委員長)

中山間地域の集落のみに限定されるのか。

(課長)

活性化している集落には、農業だけでなく、歴史、伝統、文化といった横断的取組によるものも見受けられており、限定しない方向で考えたい。

(委員長)

選定地域は、事務局でデータを示して委員会で確認・承認するということになるのか。

(事務局)

選定地域(案)について経過説明を行い、委員会で承認して頂きたいと考えている。

(委員長)

選定基準に景観が入っているのであれば、資料に写真の添付をお願いする。数字だけだと評価しようがないので、資料にはコメントも分かりやすく付けてもらいたい。選定にあたり、現在の営農状況は、ガチガチにウエイトを大きくしないでほしい。農業的景観があるということは、農業をやっていることだから、そこに、営農組織や法人がなければいけないという項目は外すべき。また、景観には主観が入るので検討が必要。

(課長)

この検討委員会で選定するにあたっては、委員の皆さんが判断可能となるよう、事務局で十分な資料を準備したい。可能であれば、各委員の皆様にも現地確認をお願いしたいと思っている。

(B委員)

21選に選定された側にとって、どんなよいことがあるのかわかれば納得できるのではないか。その地域の事例集を作成し、県民からの理解・支援に繋げていくことも必要であると思うが、選定された後に、県などのホームページに掲載してもらって、そこから農産物を売れるようになるとか、日帰りツアーみたいな形で訪問させてもらえるようなサービスがあるなどの情報発信をやらせてもらえるイメージがよい。

(D委員)

自分の住んでいる場所は山の方に行くと20分の1に当てはまる所があるかと思うが、放作放棄の水田については、山の沢の間にも田んぼのような形があり、昔そこまでして稲を植えているのかという現場が見受けられる。そこに住む方々にしてみれば、21選に認定されても今後自分たちがやれるのかという不安がある。その受益者の方を思うと、少し辛いものがある。

(A委員)

昔の方々は、一俵でも多くということから、沢の間など不利な条件のところも頑張って作付けされたと思うが、この飽食の時代にあっては、耕作放棄地もなったなりの理由があって、景観や災害の防止に向けての保全も必要かと思うけれども、食料生産としての土地ではなくなってきているのかなと周りを見て思う。

(C委員)

農水省のホームページで、中山間地域の協定の取組事例が掲載されているが、由利本荘市が多く、地域で盛り上がっている感じがする。事例紹介をホームページに発信するだけでなく、そういうエリア同士の抱えている悩みとか取組などを話し合う機会を持つことも必要だと思う。そうすれば、地域の盛り上がり期待でき、我が中山間地もこういうことができるのではないかという気持ちが出てくる。将来に対する考え方が未来はない方向に行きがちなので、そうではない、他の意見なりを聞くことによって、地域が育っていくこともあると思う。

(委員長)

選ばれたところをどう支援していくか、あるいは関わっていけるか検討していかなければいけない。農地等の維持については、県民から感謝されることが大事で、県民としての宝であるとすれば、県民はどうやってそれを今後も支えていくのかというところが必要で、学生がそれを対象にして議論するとか、農産物を売るまたは加工するとか、オーナー制とか他のものに繋いでいくことが重要だと思う。その集落だけではなんともできないので、食品加工の業界とか、外部との交流とか、いろんなものを交えて支えていくような仕組みをつくっていかなければ、21選の候補地としませんくらいの要件はあってもいいと思う。

(課長)

今、委員長が言われた通り、ただ選んだだけではなくて、こういう素晴らしいところがあるということを経験したやり方で発信することで、一度は行ってみたいなというような気持ちとなり、さらに、そこにはこういう農産物があるとか、生産している人たちは、あったかい人たちだというような関心が得られ、様々な結びつきも出てくる。まさに交流人口の拡大となり、様々な相乗効果が出てくるのではないかと考えている。このため、元気なところを私たちが探し出して、光を当てることができれば良いと思っている。その上で、様々な特徴ある交流が広がっていければ、事業の成果になっていく。

(E委員)

選定するのは第一歩で、交流人口を増やしたりという形でサポートする方向性は私も評価したい。ただ、保全活動という言葉に縛られてるような感じがする。例えば定住・移住の促進、地域資源の掘

り起こし、新たな加工品、それに対する対価など、保全活動をきっかけにして地域存続の手がかりに成り得るようなモデルや方向性を打ち出せれば、やる気のあるところが率先して手を挙げるようになる。保全活動も大事だけれども、それを1歩踏み越えて、地域存続の手がかりとなる表現を考えてほしい。

(課長)

たしかに維持といったワードには、それだけの意味しか伝わらない。活力とか元気とか、そういう言葉を入れ、応募する人達が率先して手を挙げることができる魅力ある取組にしていきたい。

(委員長)

秋田県のオリジナルとして、枠を越えて文章を書かれたら良いと思う。地域の農家は保全をしたくて保全しているのではない。保全して、ありがとうと言っているのは、下流に住む我々の議論であって、地域の人は保全のために苦勞している訳ではない。そこを書いてもらえるといいのでは。

(B委員)

こういうことをすることが中山間に住む方々に一番いいということを最終的に書いていけばいいが、秋田の中山間の魅力を発信したいっていう意図も見え、そうすると、タイトルはたいへん重要である。秋田独自の農山村の美しさやすごさというのが、上手く発信できるようタイトルにできれば、県外・国外の方々も見るので、いろんな可能性が広がる。最終的には選定された地域や、その周辺地域に還元されるものであってほしい。

(課長)

タイトルは非常に大事であり、一般の方が見られて、誇りを持てるようなものを考えたい。